

賦の小品化をめぐつて(下)

— 賦的表現論 (I) —

稻 畑 耕 一 郎

四

賦が雄篇大作をもつてその典型と意識されてきたこと、並びにその所以については、先にいささか述べたごとくであり、また小品化が漢末魏晉以降において、特に顯著となる現象であることも、文學史上にとくに周知のこととされる。

しかし「敷陳」という様式個有の表現性により、対象を全的に描くことをもつて、長篇化を指向した賦も、當初からすべてが長大な雄篇であつたわけではなく、逆にまた短篇の賦が漢末に至つて始めて現われたのではない。むしろ、今日に遺された作品から見限り、漢初にはまず比較的短小な作品をもつて始まり、漸次長大化していったと考えるのが妥當の

ようである。

漢初、賦はまず諸侯王の廷室において興隆を見た。吳王劉濞・梁孝王劉武・淮南王劉安などが有力な庇護者となり、その下には賈誼・嚴忌(莊忌)・羊勝・公孫詭・公孫乘・韓安國・鄒陽・枚乘・路喬如といった遊士たちが集つた。この初期の賦家の作品を、漢志は「莊夫子賦二十四篇、賈誼賦七篇、枚乘賦九篇……淮南王賦八十二篇、淮南王群臣賦四十四篇」と、それぞれ少なからぬ篇數をもつて著録している。しかし、今に傳わるものは少なく、従つてその具體的な全貌を知ることとはできないものの、遺された作品から見ると、さほど長大な作品はなかつたであらうと推測される。たとえば、漢初における賦家の活動の一端を傳えるものとして引かれることの

多い『西京雜記』卷四の記事は、枚乗以下、路喬如・鄒陽・公孫乗らの作品を次のようなかたちで記録している。

梁孝王遊於忘憂之館、集諸遊士、各使爲賦、枚乗爲柳賦、其辭曰……、路喬如爲鶴賦、其詞曰……、公孫詭爲文鹿賦、其詞曰……、鄒陽爲酒賦、其詞曰……、公孫乗爲月賦、其辭曰……、羊勝爲屏風賦、其辭曰……、韓安國作凡賦、不成、鄒陽代作、其辭曰……、鄒陽・安國、罰酒三升、賜枚乗・路喬如、絹人五匹、

ここに記された作品のうち、長短をもつて言えば、鄒陽の「酒賦」が最も大きく二百三十字、次いで枚乗の「柳賦」が百六十二字、最も小さいのが羊勝の「屏風賦」四十字である。いずれにしても、賦という様式から言えば、いかにも短小な作品であると言えよう。これらの作品は、孝王の遊館に扈從して作られたもので、その意味では本來的に卽興性を持った作品であるがために、もとより長篇を形づくりにくかつたという事情はあろう。しかし、賦家の表現の場は、多少なりともそうした事情にあり、「上有所感、輒使賦之」(『漢書』卷五一枚乗傳)と言うがごときものは、必ずしも漢初の賦家

だけに課せられたものではなかつた。とすれば、漢初の短賦の存在を、ただ單に狭い意味での「表現の場」の問題や、そこからくる「卽興性」という點だけに歸することはできないであらう。そうしたことは確かにあるにせよ、漢初の賦の短小性は、結局、當時の賦家の技量を含め、賦としての表現の未成熟性を示すものではないか、と思われる。

漢初の賦の表現の未成熟性は、措辭・排句・押韻など表現諸相の全般にわたつて指摘できる。たとえば、先に名を挙げた作品の中から、絹五匹を與えられた路喬如の「鶴賦」を一例として次に引く。

白鳥朱冠、鼓翼池干、舉修距而躍躍、奮皓翅之猗猗、宛修頸而顧步、啄沙磧而相權、豈忘赤霄之上、忽池藻而盤桓、飲清流而不舉、食稻粱而未安、故知野禽野性、未脫籠樊、賴君王之廣愛、雖禽鳥兮抱恩、方騰驪而鳴舞、憑朱檻而爲歡、(元部・眞部、元部眞部合韻)

自らを朱冠の鶴に擬え、君王の恩寵の下で歡を盡していることを詠った作品で、阿諛獻媚は歴然としているが、その限りでは遊館扈從という「表現の場」によく稱つており、絹を

賞與されるに値した所以でもあろう。しかし、表現の點から言えば、錘鍊を凝らした詩句があるわけでもなく、比喩も類型的であり、全體として平板さを免がれない。押韻も、元部眞部合韻と考えると、途中で換韻することなく、一韻で到底している。これを後の作品、たとえば同じく「鳥」を題材とし、やはり同様に籠の鳥たることを詠った後漢末の禰衡「鸚鵡賦」などと比較してみれば、その表現の質的な差、表現力の違いは一層瞭然とする。「鸚鵡賦」も、その序によれば、章陵太守射の求めに應じて禰衡が卽座に作りあげたもので、小品と言つてよい部類に入る作品である。漢初の賦の短小性が、單に卽興性云々の問題だけでないことは明らかである。作品の長短は、ここでは表現の量の問題であるとともに、より本質的には表現の質に關わるものとしてあることが理解される。漢初の短賦は、能動的な意味において小品であつたのではなく、むしろ賦的表現として長篇を形成し得るまでに成熟していなかつたことによる部分が大きいと考えられる。なぜならば、このことは、右に示した、言つてみれば偶然的に遺された賦家の作品にだけでなく、比較的完成度の高い作品の傳えられる同時代の賈誼や枚乗などにおいても、程度の差こそあれ、やはり指摘できるからである。賈誼の作としては

賦の小品化をめぐつて(下) (稻畑)

「弔屈原賦」⁽³⁾「鵬鳥賦」⁽⁴⁾「旱雲賦」⁽⁵⁾「虞賦」⁽⁶⁾「惜誦」⁽⁷⁾が、枚乗の名をもつては「七發」「柳賦」「梁王菟園賦」が傳わる。このうち、たとえば「鵬鳥賦」は、その辭の冒頭は次のように始まつている。⁽⁸⁾

單闕之歲、四月孟夏。庚子日斜、服集余舍。止于坐隅、貌甚閒暇。異物來辟、私怪其故。發書占之、讖言其度。曰野鳥入室、主人將去。諸問于服、余去何之。吉虜告我、凶言其災、淹速之度、請余其期。(。魚部、之部)

四言を基調とした句型であることがまず注目される。途中數箇所五・六・七言の句を雜えるほかは、ほぼ全篇を四拍の韻律で押し通している。この作品が、後世の長篇の賦が見せるような暢びやかさに缺けると感じられるのは、内容的に説理に偏しているということからだけでなく、おそらくは短くとぎれる韻律を終始繰り返している平板さにあると思われる。それは、ある意味で鬱屈した心情を訥訥と述べるこの作品の雰囲気と合致して、表現効果を高める結果を生じている側面もあるが、措辭の硬質さともども、賦の表現としてはやはり完美な姿を示したものと認め難い。「弔屈原賦」や

「惜誦」が、所謂「楚辭」的な表現世界から十分脱していないこととともに、なお賦の表現としては未成熟な状態にあつたと言わざるを得ないであろう。

こうした漢初の賦の中にあつて、質量ともに一應賦的表現の完成した姿を示すものは、むしろ八賦⁽⁷⁾とは題さない枚乗の「七發」である。この作品は、周知のように、楚太子と吳客とによる問答の體をとり、糸竹管絃、飲食車馬、畋獵觀濤などのことを陳べて、太子の病根の所在を明らめ、それを癒す法を語り示すという構成をとつてゐる。全二千三百三十餘字、漢初の作品の中では最も大きな作品である。賦の長篇化は、敷陳列擧によつて事物事象を全的に捉えようとした様式個有の表現性を核として發したものであるが、實際の作品のうえでそれを立體的に支えたのは、この「七發」に示されるような、劇的・物語的な要素を含んだ敘事的作品構造とでも言うべきものである。

敘事的な文藝が、一般に長篇であり、長篇であることによつてその表現性の眞價を發揮すること、またその展開のうちに虚構性が混入することは、東西古今を分たず普遍的に認められる表現の原理である。⁽⁸⁾ 賦もただ對象を羅列的に配しているだけでなく、作品全體の大きな枠組みとして虚構を用い、

劇的・物語的な要素を導入していることはよく知られるところである。また、そうした手法が賦家の側に意識されたものであつたことも、子虛・烏有・亡是・憑虛・安處などといった登場人物の命名のあり様にも端的に示されて周知のことである。⁽⁹⁾ しかし、假空の人物を設定し、三人稱型式で敘述される作品ばかりがそうであるのではなく、自稱の形をとつて語られる作品のうちにも、敘事的構成を見ることが出来る。たとえば、後漢の張衡の「思立賦」などは、懷才不遇の主人公八私⁽¹⁰⁾（余・吾・我）が、周の文王の龜卜に従つて混濁の世を脱し、天地四方に安息の地を求めて旅出つが、結局念ひは遂げられず、巫咸の占夢によつて再び故居に歸ろうとするまでの心の彷徨を描いた作品で、一種物語的な構造を内に持つてゐる。班彪「北征賦」・曹大家「東征賦」や班固「幽通賦」なども、この自稱の系統に屬す長篇の敘事作品である。こうした敘事的構成は、言つてみれば「楚辭」以來の傳統であつて、漢賦の創設ではないが、對象を全的に表現する敷陳列擧という平面的な手法によつて長篇化を指向する賦が、劇的・物語的な骨格——敘事的要素——によつて立體的に支えられている事實は、それが賦の長篇性の本質に關わるものであるだけに、改めて確認しておく必要があるわけである。

「七發」が漢初の作品の中で注目されるのは、その長篇性においてだけでなく、個々の表現の點でも、なお呪的な影を曳いていた「楚辭」の表現世界から抜け出し、華麗で暢びやかな賦的表現の世界に踏み込んでいることからである。たとえば、無限に變化する波の百態を描いた部分(一部)を拔萃して左に示す。

其始起也、洪淋淋焉、若白鷺之下翔。其少進也、浩浩澄澄、如素車白馬、帷蓋之張。其波涌而雲亂、擾擾焉如三軍之騰裝、其旁作而奔起也、飄飄焉如輕車之勒兵。六駕蛟龍、附從太白、純馳浩蜺、前後駱驛、顛顛印印、楮楮彊彊、莘莘將將、壁壘重堅、沓雜似軍行、匍匐勾磳、軋盤涌裔、原不可當、觀其兩傍、則滂渤拂鬱、閭漠感突、上擊下律、有似勇壯之卒、突怒而無畏、蹈壁衝津、窮曲隨隈、踰岸出追、遇者死、當者壞、(陽部・鐸部¹⁰・質部・脂部)

押韻や句型の點でまだ整然としない所が若干残るはかは、語彙の彫琢や比喩の用い方などに細かな配慮が窺え、無限に變化して止むことのない波の様態が躍動的に文字に寫しとられている。司馬相如の作品に始まるとされる隔對句の初原⁽¹⁾

賦の小品化をめぐる(下)(稻畑)

的なものが「其波涌而雲亂、擾擾焉如三軍之騰裝、其旁作而奔起、飄飄焉如輕車之勒兵」に見えるのも注目されるであろう。また、引用した部分にもその一端が窺えるように、全體を通して、あらゆる對象が微細な部分にまでわたつて描き出されておき、この作品が後世のものと較べても「信獨拔而偉麗矣」(劉勰『文心雕龍』雜文)と評されたり、また従つて當時の賦家の中にあつては、枚乗が「尤高」(『漢書』卷五一枚乗傳)と稱賛されたのも當然のことと思われる。賦の表現力は、ここまで成熟したのである。

ところで、この二千三百餘字を列ねる長篇の「七發」が、全體的な描寫力・表現の質において漢初の作品群の中で際立っているこのことは、賦の表現にあつては、作品の長篇化はその質の上昇と呼應するかたちでなされたことを、少なく相反することなく緊密な關係のうちに存在することを、示すものと言えるであらう。漢初の幾篇かの作品の實態は、賦が自らを長大化することによつて相對的にその表現力・表現の質を高めていつたこと、また、表現力の向上が賦の長篇化を可能にしたこと、そして賦の完美した姿が長篇作品において體現されること、そうしたことの一端が示唆されているようである。では、この時點における長大で華麗な賦への「成長」

は何を意味するのであろうか。賦的表現のかかる進展は、もとより賦という表現様式それ自体に内在する敷陳性や敘事性などの開發によるものであるが、言語表現の變化が、その言語を成り立たせている社會やその時代の人々の意識と無關係になされるわけはなく、賦的表現の開發伸長も、當時の社會的・政治的動向やそれによつて形成されていつた人々の意識などと根の部分において深く結びついていたのではないかと考えられる。

五

漢初の賦の有力な愛護者の一人吳王劉濞は、高祖劉邦の兄劉仲の子で、高祖が淮南王英布を討つたとき（前一九六年）、從軍して功をたて、それによつて三郡五十三城に及ぶ廣大な吳國の王に封ぜられた人物であつた。⁽¹²⁾彼は王國內において、銅山の經營や私錢の鑄造・鹽の製造販賣などを行なつて國力を養ひ、諸侯王の中でも最も強大な富國を築き、その勢いは都長安の中央政權をも凌ぐほどであつた。漢初の遊士賦家たちが、まず吳の地に身を寄せたのも、一つにはこの財政力によつて興隆した文化を背景としているものと考えられる。しかし、漢初以來、異姓の諸侯王を廢絶してきた中央政權は、

文帝劉恒のころから、この同姓諸侯王の勢力の伸長を危惧し始め、景帝劉啓の時代になつて、賈誼や鼂錯の建言を納れ、⁽¹³⁾封地削減の政策に移り、まず楚王戊、趙王遂・膠西王卬らの封地を罪を以て削つた。⁽¹⁴⁾こうした情勢の中で、諸侯王たちは自らの危機を感じ、吳王濞を盟主として兵を擧げたが、ほとんど百日ならずして失敗に歸し、ことごとく誅滅された。⁽¹⁵⁾これが世に言う「吳楚七國の亂」で、この事件を境に、諸侯王に對する統制は様々な面で強化され、⁽¹⁶⁾實質的な中央集權體制が整備されることとなつた。⁽¹⁷⁾

この吳王舉兵の時、枚乗はその下にあつて、これを諫奏したが納れられず、他の遊士ともども吳を去つて梁の孝王の客となつた。その後、孝王の死去とともに一時淮陰に歸つたが、まもなく武帝の徵に應じて長安に上る途次、病を得て道に卒した。時に武帝即位の年、建元元年（前一四〇年）のことであつた『漢書』卷五一本傳。枚乗の死と前後して、武帝の時代に登場したのが、後に「賦聖」と稱される司馬相如である。⁽¹⁸⁾相如が八賦という文學をもつて、この時代に登場して來たことは、おそらく全くの偶然ではないであらう。⁽¹⁹⁾この時代とは、一言で言えば、東アジアにおいて古代「帝國」の確立が實質的になされた時代であつた。

吳楚七國の「叛亂」の「平定」は、政治的に見れば、中央集權體制の強化をもたらし、官僚機構の整備・内政の充實へと繼ながつたが、文學的な立場から言えば、諸侯王の衰退は、その廷室で行なわれていた文學である八賦⁽²⁰⁾を、中央長安の宮廷の文學として押し上げることとなつた。ここにおいて枚乗が長安に徴し出されたことは、その意味で象徴的であり、またこの時代に司馬相如によつて賦的表現の完成がなされたことも暗示的である。文學は、時に、來たるべき時代の危機の豫兆としてあつたり、また過ぎ去りし時代への挽歌としてあつたりしながらも、なおその文學が現に呼吸している時代の大きないぶきの中で、社會の動向や人々の意識とに關わりなく存在することはできない。むしろ、文學は、その感性によつて、他の何ものにも比して鋭くその時代を象徴してさえていると言えるであらう。とりわけ、賦は、その表現の場を第一義的には政治の場である宮廷という八晴⁽²¹⁾の場に求めており、時代の波はそれだけより直接的に受けざるを得なかつたものと考えられる。

武帝の時代を中心とした中央集權體制の確立と官僚機構の整備、また外征による周邊異民族の制壓と版圖の擴大等（それらは相互に關係しあつたが）は、「東アジア世界の形成」へと

賦の小品化をめぐる（下）（稻畑）

繼なぐる壯大な歴史のうねりであり、賦は、そのうねりを生み出す八世界⁽²²⁾の中心たる長安の宮廷に入つて花開いた文學であつた。賦が長篇化し修辭化を指向するのは、先に述べたような個有の表現性に基づくものであるとしても、かかる自己の存立基盤によつて一層の伸長を見たであらうことも、それに劣らず本質的なことであつたと理解される。その賦の表現が實際にどのような壯大華麗であつたかは、すでに前稿において二三の例を擧げて見たところであるので、ここには繰り返さない。ただ重ねて留意すべきは、司馬相如が「控引天地、錯綜古今」という意氣込みをもつて「子虛上林賦」の創作に當つた（と傳えられる）こと、「合纂組以成文、列錦繡而爲質……賦家之心、苞括宇宙、總覽人物」と言つて作賦の秘訣を答えた（と傳えられる）ことなどが、かかる時代状況の中において始めて可能ではなかつたかと言ふことである。賦が絢爛たる措辭に身を包み、敷陳列擧の表現法と敍事的構成とをもつて益々長大化・饒舌化し、事物事象を全的な相貌において、かつ細緻に、言語に寫そうとした謂わば壯大な試みの背景には、漢という古代「帝國」——それは東アジア全體に及ぶものであつたが故に、當時にあつては、確かに汎地球的な完結した一つの世界と意識された⁽²³⁾——の確立が大きく關わつてい

るもののように思われる。言語表現における全體性への指向は、擬似的なものであれ、時代そのものの心的な状況として全體性への視野の開放が前提とされ、この時期に壯麗な賦的表現が可能となつたのは、そうした視野が状況の側に形成されたからであると考えられる。

たとえば、言語表現の世界において「天地」「宇宙」を具現しようとしたのが八賦⁽²⁴⁾であつたとすれば、祭政禮教の上で八建築⁽²⁵⁾という形をとつてなされたのが「明堂」制と言われるものであつた。明堂制については、時代によつて異なり、説くところの書物によつても違い、不明な部分も多いが、一九五六年西安西郊（漢の長安城の南郊）から發掘された禮制建築の遺址調査によると、この時代のものは、中央に重層臺謝式の建物を置き、それを四方に門を設けた方形の牆壁で圍み、更その周囲に溝渠を圓環狀にめぐらしたもので、その構造は天地を象つた縮圖とされる。そこは天子が實際に政教を執り行なう場所であるとともに、天地を祀り、祖宗の靈を配祀した祭政一致の建物であつた。⁽²⁶⁾そして、その祭儀には周邊の異民族も來朝して助祭に加わつた。⁽²⁷⁾つまり、明堂の建設は四海を支配したことを象徴的に意味し、漢では武帝が泰山の山麓にこれを作つて封禪の儀を行なつたのを始めとし

⁽²⁸⁾て、王莽執政のときに平帝劉衍が長安に、漢王朝再興の光武帝劉秀が泰山封禪ののち洛陽に建設した。⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾この明堂建設の時代に暗合するようなかたちで、それぞれ司馬相如・揚雄・班固という賦の代表的作家が活躍したことは、賦が正しく時代の心的状況として全的な視野が可能であつた時期に、最もよくその本領を發揮し得たことを示すものであらう。⁽³¹⁾それはまた、賦とその表現のあり様が、他の如何なる表現様式にもまして、この古代「帝國」漢朝の無形の心的状況を的確に表現し得たものとして存在していたことを示すものに他ならないであらう。そして、その中には、上古における氏族の呪術が、古代統一國家の儀禮となつて體系づけられてゆくに應じて、言語表現もまた、呪的・靈的な機能を稀薄化しつつ、より美的になるとともに、國家の儀禮・秩序・政治・體制の中に組込まれていつた姿を見ることができよう。

賦は、謂わば「天地」「宇宙」の無限の現象を全的に敷き陳ねて描こうとし、そのことによつて限りなく八擴大⁽³²⁾し、長篇となつたが、同時にそれは、いかに長大化しようとも、畢竟一箇の言語空間のうちに「天地」「宇宙」を八收斂⁽³³⁾化せんとする試みであつた。一種壯絶な力業でもあり、また虚しい徒勞ともなつた。揚雄について、一方に「每上甘

泉、詔使揚子雲作賦、爲之卒暴、倦臥、夢五臟出、以手內之、及覺大小氣、病發、一年而死」(桓譚『新論』⁽³²⁾)という壯烈な傳承があり、また他方に「童子彫虫篆刻」「女工之蠹」(法言『吾子篇』)と言つて晩年は筆を折つたとする傳承があつて相矛盾するようであるのも、かかる賦的表現のあり様によつてきたところのものである。しかしそれは、文學、廣く言語表現のもつて克服し難い矛盾の一つの原型を示すといつてもよいであらう。

ここに賦は、長大化するとともに益々細密化し、細密化することで愈々長大化する、という現象を生んだ。漢初以來の賦の表現の成熟が、作品の長篇化と比例するようであつたのも、そのひとつの結果である。そして、その極點の一つが、七千七百餘字からなる漢賦最大の作品、張衡の「二京賦」となつて結實した。⁽³³⁾張衡「二京賦」は、『後漢書』卷五九本傳によれば、天下に久しく太平がうち續き、王侯以下みな奢侈をきわめているのを諷諫せんとする意圖の下に、前後十年の歲月をかけて作られたものであつたという。また、自ら表明するところによれば、「故相如壯上林之觀、楊雄聘羽獵之辭、雖系以隳牆填壘、亂以收置解罟、卒無補於風規、祇以昭其愆尤」と、先行の賦家の表現への批判を出發點としてゐるようであ

賦の小品化をめぐる(下)(稻畑)

るが、それは壯年にあつた張衡がそれらを越えるべき先行作品として意識せざるを得なかつたことを問わず語りに述べたものであつて、從來の表現の方法を根本的に否定し、それを變革しようとしたものではなかつた。むしろ、從來の賦の表現をもつて一つの限界にまで押し進めた作品であつたと位置づけられる。西京長安の美を述べる憑虛公子と、東京洛陽の優を説く安處先生の問答の形式をとり、それを大枠として、その中で、兩都の政治・歴史・地理・文物・世態・風俗・行事等々の萬般が細かに描き出されている。華麗で誇張された表現がやや影を潛めた一方、細緻な描寫部分が眼につくようになつてゐる。兩都に關わる事物事象を、全的に、かつ細緻に描こうとしたのであるから、作品は長大化せざるを得ず、竟には七千七百餘字にのぼる長大な作品となつたわけである。巨視的なものと微視的なものとが統一された表現世界、擴大化と收斂化とが同時的になされた表現世界、それが長篇の賦の指向した表現の世界であつた。司馬相如のいう「苞括宇宙」の世界であり、揚雄のいう「彫虫篆刻」の世界であり、兩者の併存合體した世界であつた。⁽³⁴⁾ちなみに、「宇宙」とは、「天地四方曰宇、往來古今曰宙」と注されるように、空間的な擴がりだけでなく、時間的概念をも内に含んだ言葉であつた。

このように、外的な無限の存在現象を可能な限り刻明に言語によつて再構成しようとしたのが、長篇の賦の世界であつた。しかし、言語表現においてそうしたことが可能であると確信し、かつそうした表現によつて讀む者(たとえば、爲政者)を動かし得る(たとえば、諷諫)という一種樂觀的な言語表現意識を持つことができた時代社會、それは安定した秩序的な時代社會においてではなかつたか。内には所謂二十等爵制に示されるような遍戸の民に至るまで皇帝の個人身支配が貫徹され、外には、内臣・外臣・外客臣・朝貢國・隣對(敵)國という徳化の論理による區別をたてて「世界」を控制し得た時代社會において「可能」な表現ではなかつたか。先に明堂制を一例として、賦の表現のあり様を對照したのも、賦の表現の全體性指向が、當時の思想狀況の中で孤立した現象ではなく、むしろ所謂「儒教の國教化」などの動きを含めて、時代全體の心的狀況と極めて密着したものであることを考えてみようとしたからに他ならない。賦において諷諫の存在がことさら説かれ始めたのも、この時の禮教主義の風潮と無關係でないことは、改めて言うまでもない。壯麗な文字を敷き陳ね、事物・事象を全的な相貌の下に細緻に表現し、なおかつ諷諫性をもそこに込めんとした長篇の賦が、この時期に成

熟し完成を見たことは、賦家自身における自覺の有無とは別に、賦の表現が漢「帝國」の東アジア全域に及ぶ一元적支配の確立と、それによつて形成されていった人々(知識支配層)の心的狀況の中においてなされ得たものであることを示唆しているようである。漢初の賦が、長篇の問題を含めて、表現論的に様々な意味で未成熟であつたのは、ひとり作家の個人的な技量の問題ではないのである。では、同様のことが、漢末の小品化現象についても指摘できはしないであろうか。

六

その時々々の事件が、歴史の上に期を劃することがあるとしても、個々の言語表現のひとつひとつに直接的に對應するわけではない。しかし、時代社會全體の趨向は、やはりゆるやかながら、確實に、言語表現を根底から浸觸し變質させてゆくものと思われる。壯麗な表現の賦が、漢「帝國」の興隆とともに開花した文學であるとすれば、その成立基盤としての漢王朝の推移は、自ら賦という言語表現の側にも何らかの影響を及ぼさないわけはなかつたであらう。

光武帝劉秀によつて再興された後漢王朝は、明帝・章帝の

時代に最盛期を迎えたが、續く和帝以後、特に第六代安帝（在位一〇六年～一二五年）・第八代順帝（在位一二五年～一四四年）のころから、外戚と宦官との政權抗爭の激化とともに衰退のきざしが現われた。表面的には、内朝における外戚の專政、宦官の横行というかたちをとつてそれは露出したが、背後には、鄉村社會における豪族の成長自立という國內問題があり、對外的には周邊異民族の抵抗離反という問題などがあつて、それらの不安定な政治社會狀況が、政權抗爭とともに漢王朝の一元的支配を次第にゆるがし、やがて「黃巾の亂」を誘發しつつ、群雄割據、三國鼎立という動亂の時代へと向つた。

この時代社會の安定から混亂への過渡期に出た賦家が、相如・揚雄・班固と並び稱される張衡である。彼は章帝の建初三年（七八）に南陽に生まれ、順帝の永和四年（一三九）に卒⁽⁴¹⁾している。章帝の時代は、後漢王朝の最盛期に當り、それ以後は外戚と宦官との政權爭奪に象徴される混亂した時代であつた。この時代を生きた張衡が、その壯年のころに漢賦最大の「二京賦」を作り、最晩年には小品として優れる「歸田賦」を残していることは注目に値する。「二京賦」については先に述べたが、張衡が賦の史的展開の中で、大きな轉折點とみなし得る所以は、その漢賦最大の長篇と同時に、全四十句二

賦の小品化をめぐつて（下）（稻畑）

百十一字という小品の「歸田賦」を作つているところにある。「歸田賦」は、晩年志を得ず、官を辭して故郷に隱退しよう⁽⁴³⁾と決意した時の懷いを詠つた作品で、それが從來の賦と明確に異なるのは、小品であることと、表現の點で敘事的なものから抒情性の強い表現へと轉じていることである。また、次に示すように、描寫はすでに羅列的・網羅的であることもやめてゐる。

於是仲春令月、時和氣清。原隰鬱茂、百草滋榮。王睢鼓翼、鸛鷀哀鳴。交頸頡頏、關關嚶嚶。於焉逍遙、聊以娛情。爾乃龍吟方澤、虎嘯山丘。仰飛纖繳、俯釣長流。觸矢而斃、貪餌吞鉤。落雲間之逸禽、懸淵沈之魴鱖。（耕部、
・幽部、△魚部、幽部魚部合韻）

眼に映じた外界を寫した部分で、その限りでは敘景のうた、と言うべきであるが、從來の賦の表現、たとえば次に引く張衡自身の「南都賦」における「自然」描寫と比較すれば、著しく異なつて感傷的であることが理解されるのではないか。

其山則崕嶠嶠嶠、嵯岿嶢嶢。峩岿屹屹、幽谷

簌岑、夏含霜雪、或岩嶙而纏連、或豁爾而中絕、鞠巍巍其
 隱天、俯而觀乎雲霓、若夫天封大狐、列仙之蹕、上平衍而
 曠蕩、下蒙籠而崎嶇、坂坻截嶭而成、巖壑錯繆而盤紆、
 芝房菌蠢生其隈、玉膏潄溢流其隅、崑崙無以參、閭風不能
 踰、其木則……、其竹則……、爾其川瀆……、其水蟲……、
 (。月部、。魚部)

まず入聲韻の文字を重ねて險峻峨峨たる山の形狀を表わし、次いで周圍の狀況の描寫に入る。その描寫は網羅的かつ細緻であるため、山容を眼前に彷彿させるようであるが、讀者に與えるイメージとしては平面的なものに終つて、言葉に奥ゆきを感じさせるところがない。一方、「歸田賦」は、天の氣の和らいだ仲春の、花開き、枝を伸し、鳥の鳴く外界を描き、取りたてて技巧を凝らした表現がなされているわけではない。しかし、その描かれた外界は、最多の死の大地から復活した生氣あふれる自然であり、その中に歳老いた失意の作者は歸ろうと言うのである。外界の氣が上昇に向つているのとは逆に、作者の心は下降する。この交叉對照の中に、「歸田賦」の外界の描寫が生まれており、「歸田賦」の敍景が確かに感傷的であると感じられるのは、その△景▽の裏に、作

者の△情▽の深く潜んでいるのを讀むことができるからであるに違いない。そして、この點において、「歸田賦」は、敍事的表現を主體としてきた賦の流れの中で、一つの大きな轉回點を打った作品として評價できるように思われる。漢末魏晉の小品化が、漢初の短小な作品の存在と異なつて、文學史上に些かでも積極的な意味を持ち得るものとすれば、それはこうした人間の存在の根底に觸れようとした作品を幾篇か生み出したことによるものと思われる。前稿冒頭にあげた「寥寥的幾行」の向秀「思舊賦」も、實にそうした小品の一つであつた。

七

敍事的なものが長篇化し、抒情的なものが短篇化するといふ現象は、言語表現にあつて普遍的な原理によるとしても、賦におけるこの轉回の意味を考えることは、また自ら別の次元に屬する問題である。それには、その轉回點たる張衡自身の内的な問題に即して明らかにされねばならない側面もある(4)うが、小稿では張衡「歸田賦」だけの問題としてではなく、個々の作家・作品を越えて小品化が生じて來ている背景の現象を問題としてきた。漢末魏晉の賦がすべて抒情的な小品と

なつたわけではないが、その傾向が顯著となつた事實は、すでに大方の理解にあるごとくである。⁽⁴⁵⁾この現象は、長篇化するることによつてその表現の本領を十全に發揮してきた賦にとつては、逆行的・退行的な現象と見なければならぬ。賦の長篇性が、敷陳という表現手法により、敘事的構成をとつて、全的な視野を可能とした時代社會の心的狀況の中で生成されてきたものとすれば、まずはそうした諸狀況に何らかの變化が、複合的に生じたものと考えられるであらう。長篇の賦のもつ表現の特質が、それを成立させてきた外的狀況の變化によつて、矛盾として露呈してきたことも考えられる。

賦は漢初以來、措辭を洗練し、句型を整え、押韻を正し、典故を用い、排句を理め、かつ長大化するという方向で表現の質を高めてきた。しかしその謂わば修辭化と長篇化とは、ある一定以上は相反し相克する性向にあるものであることは、そのために賦が傑出した才能による多日の苦思を経て始めて可能な表現體となつていたことを想起するまでもなく、明らかなことである。それはまた、前稿にも述べたように、主題や素材の新らしさに表現の開發を求めるのではなく、専ら修辭面での多彩さに意を注ぎ力を致してきた賦的表現の一つの行き着いた地點でもあつた。その意味で、漢末のこの時期

賦の小品化をめぐつて(下) (稻畑)

に、王延壽の「魯靈光殿賦」を見た蔡邕が、その表現の美事に嘆賞するあまり、自らは作るのを止めたという話が傳わるのは、注目されるであらう。賦における表現者の關心は、へななをV描くかよりも、専らへいかにV描くかに向かい、そうした意識は確かに一面で表現の質を高めてきたのであるが、他面で表現が現實から乖離して空疎化し、ここに致つては、(従前の方法をもつてしては)それ以上の伸長が困難な狀態に逢着していたのではなかつたかと思われる。それは、ひとつには賦をとりまく外的現實の變化によるものでもあるが(後述)、賦の表現自體においても一種の内的な膠着狀態が生じていたように思われる。と言うのは、この蔡邕の前後の時代から、賦の題材が俄かに多様化し、建安期を含めれば、それ以後の廣範圍にわたる賦の題材はおおむね出揃つてきている事實が一方にあるからである。從來、宮殿・遊獵・山川・京城等に集中していた賦の主要題材は、この時期に多様化し、登臨・憑弔・悼亡・傷別・遊仙・招隱・豔情・山水等、さまざまな分野に擴がつた。⁽⁴⁶⁾特に詠物賦といわれるものの流行は、この現象を助長し、花鳥風月・器物調度など身邊のあらゆるものが題材として取られるようになった。表現の關心が、ただへいかにVということだけにではなく、へななをV

という面にも大きく向けられるようになったこの現象は、結果として、賦の表現の領域を擴張したと言えるのであるが、その由來するところは、ひとつには従前の賦的表現が内的に膠着状態に陥つていたことにあり、それを打開する試みが題材の多様化という形を取つて表われたのであると考えられるのである。そして、小品化も、實はこの題材の多様化と密接に呼應した現象として生じたもののように思われる。

次に、王粲の「登樓賦」をあげる。若年のころ蔡邕の知遇を得、後年曹操の幕下に入り、建安七子の筆頭に挙げられるというその文學史上の橋渡しの位置が、この場合特に注目される。

登茲樓以四望兮、聊暇日以銷憂、覽斯宇之所處兮、實顯敞而寡仇、挾清漳之通浦兮、倚曲沮之長洲、背墳衍之廣陸兮、臨臯隰之沃流、北彌陶牧、西接昭丘、華實蔽野、黍稷盈疇、雖信美而非吾土兮、曾何足以少留、遭紛濁而遷逝兮、漫踰紀以迄今、情眷眷而懷歸兮、孰憂思之可任、憑軒檻以遙望兮、向北風而開襟、平原遠而極目兮、蔽荆山之高岑、路逶迤而脩迴兮、川既漾而濟深、悲舊鄉之壅隔兮、涕橫墜而弗禁、昔尼父之在陳兮、有歸歟之歎音、鍾儀幽而楚奏兮、

莊舄顯而越吟、人情同於懷土兮、豈窮達而異心、

この作品も全五十二句三百二十九字の小品である。ただ小品であると言うばかりでなく、右に示したように、表現のあり方が従來の賦的表現と確かに異質であることが感じられるであろう。外界を描くにしても、従來の賦が全事物・全事象を網羅的にかつ細緻に言語において體現しようとしていたのに對し、この作品では、外界は作者と別に客觀的・抽象的に存在するものとして表現されているのではなく、すべて作者の望郷の念を喚起させるものとして具體性をもつて捉えられている。つまり「世界」は、あくまで表現者の「自我」という一點を通して感得され凝視されたものとして存在しているのである。それは、この王粲「登樓賦」や先にあげた張衡「歸田賦」・向秀「思舊賦」など完篇として傳えられる作品ばかりでなく、斷片を遺すばかりのこの期の他の多くの作品のはしばしに見出せる特質である。ここでは表現者の主體的な「自我」を通して「世界」を感得する地平に降り立つたことによつて、俯瞰的な視野は喪われ、一箇の言語空間のうちに「世界」の全體を取り込もうとする壮大さは消滅している。しかし、そのことによつて、個人の内的な感情のこまやかな

表出——抒情表現——が、△賦▽という表現様式において、より多く可能となつてゐるのを見ることが出来る。

また、例をあげて言えば、たとへば、この期には従來の賦にはなかつた死者を哀悼する心情を綴るような作品も作り出されてきている。「傷天賦」「悼天賦」「傷魂賦」「悼亡賦⁽⁴⁷⁾」などと題された一連の作品がそれである。その一例として曹丕の「悼夭賦」を序とともに引く。

族弟文仲、亡時年十一、母氏傷其夭逝、追悼無已、予以宗族之愛、乃作斯賦、

氣紆結以填胸、不知涕之縱橫、時徘徊於舊處、覩靈衣之在牀、感遺物之如故、痛爾身之獨亡、愁端坐而無聊、心感感而不寧、步廣廈而踟躕、覽萱草於中庭、悲風蕭其夜起、秋氣慄以厲情、仰瞻天而太息、聞別鳥之哀鳴、

この作品は、『藝文類聚』卷三四に引かれて傳わるもので、書物の性格上、これをもつて完篇とは認め難く、小品であるとして俄かには斷定できないが、敘事的な側面はより一層後退し、力點が個人の内的な感情の惜しめない表出に置かれてゐるのを見て取れよう。それは死者を哀悼するという題材であるか

賦の小品化をめぐる(下) (稻畑)

らであると言へばそれまでであるが、それは一面的な指摘でしかない。問題は、そうした題材が賦において選び取られてゐることであり、賦がまたそれをよく表現し得てゐるところである。△詩▽による悼亡のうたは、後世しばしば作られてゐるが、今日に存するものでは潘岳の「悼亡詩」が最も早い。これが先行作品の散佚からではなく、事實においてもそうであつたとすれば、賦は詩に先立つてその敘情性の強い表現の領域をも切り開いてゐたことになるであらう。この時期、賦と詩とが題材を共有する作品がいくつか存在し、特に詠物題の中にはその例が少なくない。そこにおいて、賦の作品がおおむね詩に先行して作られてゐるのであるが、抒情性を第一義とするような題材においてもそうであつたことは、賦の表現が、それ以前に較べ確かに大きく變化していることを明示する一つの具體的な例であると思われる。

賦と詩とに共通・類似の題材の作品が存在し、しかもなお一方が賦とされ、他方が詩とされていることは、兩者の表現性の本質とその差異とを考へる上で貴重な材料を提供してゐると言へるが、⁽⁴⁸⁾にもかかわらず、兩者が極めて接近してゐる事實は、やはりそれとして注目しなければならない。賦的側面について言えば、それは、なお敷陳という個有の表現原理

によりながら、長篇の賦に顯著であつた敘事性を稀薄化させ、抒情性の表出を第一義とする表現に轉じていると言うことである。⁵⁰抒情性への接近は、賦的表現にとつて表現領域の擴大であつたに違いないが、それはそれだけ賦個有の特質から遠ざかるものであり、膠着状態にあつた賦の自壞衰退を結果的に一層速めることともなつたのである。全體として、賦は小品化するとともに抒情的な色合いを強くし、また一方で駢賦・俳賦という形で修辭性をより重視する作品を作り得たが、それらが賦の變型として考えられ、典型としてみられずにきたのは、賦にとつては喪われた敘事性がそれだけ本質的なものであつたことを示すものに他ならない。ただ、その退行と見られる過程で、謂わば全盛期の華麗な長篇の賦がなし得なかつた、人間へ存在Vの間に深く錘鉛をおろした文學を生み出し得ているところに、この文學様式が、我々にとつていかなる意味を持つ言語表現であるのかを、いま改めて問わねばならない問題性があるように思われる。

賦の小品化は、表現の抒情化を伴つた現象として現われ、對句や韻律をより重視する駢賦・俳賦へと繼がつてゆくことになるが、その變遷が賦という表現様式の内的な事情——すなわち、先に述べたような賦的表現そのものの膠着状態——

だけで起つたものであつたり、その世界の中だけで完結収束したものであつたとは考えにくい。言語表現における變化が、それを支える社會や政治、あるいはその時代の人々の心的狀況のあり様と關わりなしになされるものとは考え難いからである。この時期の後漢王朝の崩壞と社會の混亂は、賦の小品化それ自體に短絡的に直結することは少なかつたにせよ、その社會狀況の下での言語狀況・言語意識のあり様は、賦的表現の變化にも何らかの影響關係を持つたものと思われる。

この時期、言語が政治と抵觸して起きた象徴的な事件に、「黨錮の禁」と言われるものがあることはよく知られている。この事件は、儒教理念を支柱として鄉村社會において形成された世論——「鄉論」——を背景に、宦官政權を批判した所謂「清議」派の人士を、徒黨を組んで朝廷を誹謗し風俗を亂したとの罪をもつて投獄し、終身「禁錮」に處した事件で、もとより政治上の事件には違いないが、言論（清議）に對する彈壓という性格を持つたものであるところに特色があつた。恒帝の延喜九年（一六六）に行なわれたのがその最初であるが、靈帝の建寧元年（一六九）、竇武・陳蕃らの宦官誅滅策が失敗した後の彈壓はとくに峻烈をきわめ、『後漢書』黨錮傳によれば、李膺・杜密ら獄中に死んだ者だけでも百餘

人に上つたという。更に熹平五年（一七六）には、禁錮の令は「黨人」の門生・故吏・父子・兄弟にまで及ぶという徹底ぶりであつた。この苛烈な彈壓肅清によつても鄉村における清議を完全に壊滅させることはできなかつたが、この事件を轉機として、清議のうちから爲政者に對する直接的な批判攻撃は影を潛め、一般人士に對する人物批評の色合いを強めていつた。⁽⁵¹⁾

朝野亂れ、ハ力Vこそが「正義」であつたこの動亂の時代社會にあつて、人々はかつてどのように先驗的に言語表現の可能性・有用性——たとえば頌揚という形であれ、諷諫という形であれ——を信ずることができたであらうか。「黨錮」に象徵されるような苛酷な言語狀況の中で、人々は言語による表現の可能性・有用性に樂觀的であり得たとは思われず、むしろ言語の現實における無力さを實感していたと考えられる。そうであればこそ、儒家的立場にあつた知識人を中心として、言語の饒舌さを嫌い、寡黙を價值とする風がこの時期に起つてきたのである。その早い志向は、張衡と親交のあつた王符の『潜夫論』や荀悦の『申鑒』の中に見出せるが、一般化したのはやや後のことと思われる。

たとえば、漢末から魏晉にかけての知識人たちの軼事言行

賦の小品化をめぐる(下) (稻畑)

を、主題別三十六門に分けて書きとどめたものに、劉義慶の『世說新語』がある。この書物は、當時の知識層における思想や生活氣風などを窺うに恰好のものとされるが、その中には言語表現に關する話も少なからず收められていて、知識層における言語意識が全般的にどのようなものであつたかを知ることができる。⁽⁵²⁾

阮宣子有令聞、太尉王夷甫見而問曰、老莊與聖教同異、對曰、將無同、太尉善其言、辟之爲掾、世謂三語掾、衡玠嘲之曰、一言可群、何假於三、宣子曰、苟是天下人望、亦可無言而辟之、何假一、遂相與爲友(文學篇)

殷中軍嘗至劉尹所清言、良久殷理小屈、遊辭不已、劉亦不復答、殷去後、乃云、田舍兒、強學人作爾聲語(文學篇)
樂廣善、約言厭人心、其所不知、默如也、太尉王夷甫、光祿大夫裴叔則能清言、常曰、與樂君言、覺其簡至、吾等皆煩也、(賞譽篇劉注所引『晉陽秋』)

最初に擧げた話は、「三語」よりも「一言」を、「一言」よりも「無言」の價值とした有名な八三語掾Vに關するものである。この話を始め、右に引いた例は(この他にも同様の例は

少なくない)、いずれもこの時期の所謂「清談」という一見言語表現の可能性を解放したかに見える現象の中に、實は饒舌冗慢さを反價值として忌避する意識が強く存在していたことを示すものとして、しばしば引き合いに出されるものである。そこでは、饒舌冗慢さは無價值であるばかりでなく、粗野卑俗と意識され、沈黙寡黙こそが美であり都雅であると意識されているのである。

こうした傾向は、單に「清談」という狭い範圍内で孤立してあつた現象ではない。「清談」という一言語現象(従つて、それは優れて社會現象でもあつたが)の中に顯著に露われただけで、程度の差こそあれ、言語表現全般にわたるものとして存在したと考えられる。たとえば、この時期の△美△の一つの典型とみなされる王羲之の書、その彼の今に傳わる尺牘(雜帖)が、(書信という本来は内容傳達に委細を盡さねばならない「實用」本位のものでありながら)いずれも實に斷簡かと見まがうばかりの簡略さであるのも、それらが寡黙に對する美的意識に裏打ちされていたからであるように思われる。たとえば、次のようである。

奉橘三百枚、霜未降、未可多得、(奉橘帖)

不審復何似永日、多少看未、九日當採菊不、至日欲共行也、但不知當晴不耳、(採菊帖)

羲之頓首、快雪時晴佳、想安善、未果爲結、力不次、王羲之頓首、山陰張侯、(快雪時晴帖)

このような、言語の多用を反價值とし、美とせぬ意識が、人々の間に生まれ定着していつた背後には、象徴的には漢末黨錮の禁以來、言語の現實社會における無力を實感させられていた表現者たちの挫折した思念が存在していたように思われる。△力△こそが「正義」であつた亂世、漢末魏晉の時代社會にあつて、△言語△がなにもなし得ないとする意識が徹底されれば、「清談」の推移が示唆的であるように、言語表現は現實との關わりを絶つて自己の内なる表現世界に内向し、その中での充足をはかる他はない。魏晉六朝の文學が、ことさらに「政治」からの自立を主張したり、その一方で四六駢麗文と稱される美文の典型を生み、八病に至る音律説を整え、抒情的・思辨的な作品に見るべきものを残すのも、そしてまた、その終局において遊戲化へと行きつくのも、こうした一種閉ざされた言語狀況に由來するものと考えられる。

賦が大勢として長篇から小品に轉じたこの時期に、こうし

た饒舌さを反價值とする言語意識が底流としてあつたことは、そうした言語意識が賦家の側に小品化への方法として明確に自覺されたものでなかつたにせよ、その根の部分においては確かに關連した現象であつたろうと考えられる。陸機が「文賦」の中で次のように述べていることは、表面にたまたま露われたその意識の一角であらうと理解される。

詩緣情而綺靡、賦體物而瀏亮、……雖區分之在茲、亦禁邪而制放、要辭達而理舉、故無取乎冗長、

決して小品とは言えない「文賦」においてさえ、賦も、他の言語表現——詩・碑・誄・銘・箴・頌・論・奏・說——と同じように、「冗長」さを排すべきであると主張していることは注目される。また、その論據とする「辭達」は、言うまでもなく『論語』衛靈公の語に基づくものであり、この期の言語の反饒舌化への精神的支柱の中軸が儒教的理念に發したものであつたこともよく合致している。

この陸機の主張は實作者の言葉として注意を引くが、小品化が賦家に自覺された方法としてあつたとはなお斷定し難い。むしろ大勢としては無自覺のうちに（長篇を形成し難いと

賦の小品化をめぐつて（下）（稻畑）

いう消極的・退行的な現象として）小品化が始まり、陸機の時点においてようやく意識の片隅に上つたと考えるのが穩當であろう。しかし、小品化が賦家の側に主體的に選び取られたものでないにせよ、賦における小品化現象がひとつにはこの時期の言語状況や言語意識と地層の深部において關連して生じたものであることは、ほぼ間違いないことと思われる。無自覺であつただけに、それだけより根源的なものであつたと言うこともできる。

そして、もしこうした當時の言語の閉ざされた状況を、媒體として介在させることができるとすれば、賦の小品化という表現史上の變化は、それ自體の内的な膠着化とともに、實は外的な状況の變化、すなわち東アジア全域にわたつた古代「帝國」たる漢王朝の崩壊とそれに伴う社會の混亂、そしてその中で激しく揺れ動いた人々の心のあり様によつて惹き起されたと言うことができよう。自らの屬する時代社會が、どこに向つて流れてゆくのか定め難い状況の中で、人は全的な視野をもつて事物・事變を捉えることは困難であり、ただ自我という一點を通して、世界への存在は感得されるばかりであつた。その世界でも、かつてのように皇帝の個人身支配が遍戸の民に至るまで貫徹された爵制に維持されたもの

でもなく、また徳化の論理によつて「平和」的に支配されたものでなく、混亂に混亂を重ねた無秩序な、そして感覺的にはわが手に觸れ得るだけの閉塞的な狭い世界であつた。この閉ざされた心的狀況と全的な視野の喪失こそが、この時期に個人の内的な感情の表出を核とした抒情作品を多出させた地盤であつたように思われる。漢王朝の崩壊は、賦の表現の第一義的な場の重心を「世界」秩序の中心たるハ宮廷Vから、より私的な次元に移行させただけでなく、時代社會全體の心的狀況をも根底から變化させ、かつてのような華麗で壯大な賦の成立を困難にしていたわけである。その中で、左思の「三都賦」が、一時的にせよ天下統一を果した司馬氏晉朝の武帝炎の時代に作られていることは、奇妙なほどに暗合的である。が、それでさえ、絢爛たる措辭は削ぎ落とされて、漢賦の表現世界が見せたようなおおらかさは喪われ、「稽之地圖、……驗之方志、……匪本匪實、覽者奚信」(「三都賦」序)と自ら述べるように、表現の律義さばかりが前面に押し立てられた作品となつてゐる。⁵⁵ また、この他にも、長篇ということだけで言えば、潘岳「西征賦」・陸機「文賦」・木華「海賦」・郭璞「江賦」などそれぞれに特色のある作品が生み出されているが、にもかかわらず、それらが全體として、

もはやこの時期を象徵するハ時代の詩Vとして存在し得なかつたことは、時代社會の心的狀況から浮き上つた地點で、ただ賦という様式本來の表現性のみに倚りかかつて作られていたからに他ならないであらう。

賦の表現とその史的展開をめぐつては、なお検討すべき問題が少なくない。今回は、表現史における變化が、政治社會史の推移や、それによつて形成されていつたその時々の人々の無形の心的狀況と密接に關係しているということを、——そしてそれが、賦たるゆえの獨自のつながりと性格とをもつてあつたということを——、様式個有の表現性に逆行するような小品化という現象を通して檢證するにとどめたい。そこには、外的な事象事物を全的に描こうとした言語表現の可能性と限界性とが、原型的な姿をもつて示されていると言えよう。⁵⁷ 小品化は、その限界性の中から出た方法であつたが、賦にあつては、それが本來の表現性に逆行するものであつただけに、自懷現象は一層促され、抒情を核とするハ詩Vや、敘事虚構を主とするハ小説Vへと表現の中心は轉じてゆくこととなつた。

〔注〕

- (1) 羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』(第一分冊)による。以下、小稿での韻部の分類は、特に注記(注10)しな

い限り皆これに従った。

- (2) 禰衡「鸚鵡賦」序(『文選』卷二三)には「時黃祖太子射賓客大會、有獻鸚鵡者、舉酒於衡前、曰禰處士、今日無用娛賓、竊以此鳥自遠而至、明慧聰善、羽族之可貴、願先生爲之賦、使四坐咸共榮觀、不亦可乎、衡因爲賦、筆不停綴、文不加點」とある。またこれによつて、王粲孫『讀賦卮言』はいう、「賦鸚鵡于一席之間、文不加點、成篇之速、自古無如禰衡者、賦海潮以二十餘年之久、力不敢暇、成篇之久、自古無如盧肇者」。

- (3) 『文選』は卷六〇に「賈誼弔屈原文一首」として収める。『史記』卷八四賈誼傳には「及渡湘水、爲賦以弔屈原、其辭曰……」とあり、ここでも『史記』に據つて「賦」とした。『漢書』卷四八本傳も『史記』に同じ。

- (4) 「早雲賦」は、『文選』李善注(卷二六潘岳詩、卷二七謝朓詩、卷二八陸機詩)、『北堂書鈔』卷一五六に斷片が傳えられるほか、まとまつた形では『古文苑』卷三に收められている。また、「虞賦」は、『藝文類聚』卷四四、「初學記」卷一六、『太平御覽』卷五八二(「眞虞賦」に作る)に斷片が傳わる。

- (5) 王逸「楚辭章句」にいう、「惜誓者、不知誰所作也、或曰賈誼、疑不能明也」。朱熹「楚辭集注」にいう、「惜誓者、漢梁太傅賈誼之所作也」。その他、賈誼の作として題名だけ傳わるものに「臨霸池遠詠賦」(『文選』卷二六謝朓「休沐重還賦」の小品化をめぐつて(下)(稻畑)

道中詩」李善注所引「枚乘集」がある。

- (6) 引用は、『漢書』卷四八賈誼傳によつた。『史記』卷八四本傳には「單閼之歲兮、四月孟夏、庚子日施兮、服集予舍……」と奇數句末に「兮」字を付けている。兩者の相違について、中島千秋『賦の成立と展開』は「時代が百年もたつとうたい方にも一寸した變化が生じてきたことを語っている」(第四章第三節、三一六頁)という。また、劉大杰『中國文學發展史』は「體裁各異、班固必有所據」(第一冊、一九七三年版、一四一頁)という。あるいは、岡村繁『漢初における辭賦文學の動向』(『島居久雄先生華甲記念論集中國の言語と文學』)は、四字で奇數句に「兮」字を付けていることについて、「賈誼の辭賦が基調とする變則的な四言形式は、もともと長安の宮廷や高級官僚の間でこそ普遍化していた有力な句法で、……そのはじめ漢室の股肱として長安に乗りこんできた齊・楚の人々、とりわけ漢室と出身を同じくする北楚系の廷臣作家——陸賈・朱建たちが、その郷里から直接長安の宮廷に持ちこんだものなのであろう」と想定している。また、清の劉熙載『賦概』も、この點を指してであるが、「鸚鵡賦爲賦之變體」という。
- (7) 杉野正「紋事文藝」プロット(竹内敏雄編修『美學辭典』所收) 参照。

- (8) 吉川幸次郎「歷代賦彙影印本解説」(『全集』21)、小尾郊一「漢賦における娛樂性——問答體と假空人物——」(『廣島大

學文學部紀要』34)他。

- (9) この作品が全體の構想の點で「離騷」を倣っていることは明らかであるが、個々の表現においても、「離騷」を踏襲したと思われる句が頻出する。金鉅香『漢代詞賦之發達』は、五十九條にもわたつてそれを指摘している(第九章、四六頁～四九頁)。
- (10) 羅常培・周祖謨、前掲書(注1)の「鐸部韻譜」の項には、「白・驛」の押韻は指摘されていない。しかし、「驛」は「鐸」に同じであるから、「白」とは同じ鐸部に屬するものと考えた。
- (11) 鈴木虎雄『賦史大要』は「對句は漢賦に於ては必しも頻繁に用ゐられず、用ゐらるるも、兩句の間に行はれて四句の間に行はれず、即ち單對多くして隔對尙少し。……然れども隔對は相如の子虚已に之を發す」(第三篇、八一頁)という。小西甚一『文鏡秘府論考』研究篇下(第二章)も鈴木説に同じ。
- (12) 吳王劉濞のことは、『史記』卷一〇六、『漢書』卷三五の本傳によつた。
- (13) 『漢書』卷四八賈誼傳・卷四九鼂錯傳。ただし賈誼の建策は文帝の時代であり、この兩者に先立つて諸侯王の統制を主張した者に文帝の時の袁(爰)盎がいる(漢書卷四九本傳)。
- (14) 『史記』吳王濞傳に「三年冬、楚王朝、鼂錯因言楚王戊往年爲薄太后服、私姦服舍、請誅之、詔赦、罰削東海郡、因削吳之豫章郡、會稽郡、及前二年趙王有罪、削其河間郡(漢書作常山郡)、膠西王卬以賣爵有姦、削其六縣」とある。
- (15) 『史記』吳王濞傳に「孝景帝三年正月甲子、初起兵於廣陵、……初、吳王首反、并將楚兵、連齊趙、正月、起兵、三月皆破、獨趙後下」とある。趙については、「酈將軍圍趙十月而下之、趙王自殺」とある。
- (16) 鎌田重雄『秦漢政治制度の研究』第二篇第三章「漢朝の王國抑損策」参照。
- (17) 范文瀾『中國通史簡編』(修訂本・第二編)第二章、增淵龍夫『中國古代の社會と國家』第二編第二章「漢代における國家秩序の構造と官僚」、大庭脩「漢王朝の支配機構」(岩波講座『世界歴史』4所收)等参照。
- (18) 司馬相如は、始め「秩六百石」(『索隱』所引張揖注)の武騎常侍として景帝に仕えたが、景帝が辭賦を好まなかつたため、梁の孝王が來朝したのを機に、病と稱して長安を離れ、枚乘らとともに梁の地に遊び、「子虚賦」を作つており(『史記』卷一一七本傳)、嚴密な意味では、武帝の時代にはじめて京師長安に登場したのではない。司馬相如については、吉川幸次郎「司馬相如について——中國文學史の開幕——」(『全集』6)が詳しい。
- (19) 思うに、この問題を武帝の個人的な辭賦愛好ということだ

けで考えるのは必ずしも適當ではない。時代社會全體の心的狀況と賦の表現との關わりの中でそれは捉えられるべきであろうとするのが、小稿の立場である。

- (20) 梁孝王は、七國の亂に際して朝廷の側に立つて功績をあげ、一時「地北界泰山、西至高陽、四十餘城、皆多大縣」(『史記』卷五八梁孝王世家)を領し、羊勝・公孫詭・鄒陽ら「四方豪桀」「游說之士」がその下に招かれたが、孝王の死後は五人の子に分封されて勢力は衰え、それも多くは武帝の時代に廢絶された(同上)。また淮南王安は、七國に呼應して兵を挙げようとしたが、内部の反亂によつて成らず、この時は結果として封地を削減されることはなかつた。のち新らたに謀反を企てた時、事が發覺して自殺に迫いられ(元狩元年、一二二年)、國は阡かれて九江郡となつた(『史記』卷一一八淮南王傳)。

- (21) 「東アジア世界」については、西嶋定生「東アジア世界の形成と總説」(『岩波講座』『世界歴史』4)参照。

- (22) 『西京雜記』卷二。

- (23) 注(21)参照。

- (24) 明堂制について論じた近年の邦人のものに、津田左右吉『儒教の研究』二(『全集』第一七卷) 第二篇第二章「陰陽調和の方法」、狩野直喜『兩漢學術考』兩漢文學考、四明堂大學の設立、藤川正數『漢代における禮學の研究』第五

賦の小品化をめぐつて(下)(稻畑)

章「明堂制について」等があり、舊來の諸説が紹介検討されている。

- (25) 劉致平「西安西北郊古代建築遺址勘查初記」(『文物參考資料』一九五七年三期)、許道齡・劉致平「關於西安西郊發現的漢代建築遺址是明堂或辟雍的討論」(『考古』一九五九年四期)、黃展岳「漢長安城南郊禮制建築的位置及其有關問題」(『考古』一九六〇年九期)、王世仁「漢長安城南郊禮制建築(大士門村遺址)原狀的推測」(『考古』一九六三年九期)等参照。

- (26) 明堂の實際的な用途について、王世仁前掲論文(注25)は、次のように整理している。「這種禮制建築除了富有極濃重的象徵意義以外、它的實際功用大致是這樣的：1舉行祭祀典禮、2舉行召見王公大臣的典禮、3舉行頒布政令的典禮、4舉行學習禮樂的典禮、5“占雲望氣”。這座禮制建築既要滿足象徵的要求(形體・數字等)、又要滿足這些實際使用的要求。」

- (27) 『漢書』卷九九(上)王莽傳に「是以四海雍雍、萬國慕慕、蠻夷殊俗、不召自至、漸化端冕、奉珍助祭」、『後漢書』卷二明帝紀・永平二年の條に「百蠻貢職、烏桓・濊貊咸來助祭、單于侍子、骨都侯亦皆陪位」、『後漢書』卷三章帝紀・元和二年の條に「要荒四裔、沙漠之北、葱嶺之西、冒眇之類、跋涉懸度、陵踐阻絕、駿奔郊時、咸來助祭」などと見える。

- (28) 『漢書』卷六武帝紀・元封二年の條に「秋、作明堂于泰山下」とある。元封元年にも「登封泰山、降坐明堂」とあるが、これは注(臣瓚)にも言うように「郊禮志『初、天子封泰山、泰山東北趾古時有明堂處』、則此所坐者也、明年秋乃作明堂耳」である。津田左右吉(注24所引論文)は「これ(元封元年の文)は誤ではあるまいか」と言う。
- (29) 『漢書』卷一二平帝紀・天始四年の條に「安漢公奏立明堂、辟雍」とある。また卷九九(上)王莽傳。
- (30) 『後漢書』卷一(下)光武帝紀・中元元年の條に「是歲、初起明堂・靈臺・辟雍、及北郊兆域」とある。
- (31) 班固は「兩都賦」の中で、明堂の祭祀を描き、また末尾には「明堂詩」「辟雍詩」「靈臺詩」等、詩五首を付している。
- (32) 桓譚『新論』のこの文は、『北堂書鈔』卷一〇二、『藝文類聚』卷五六・七五、『文選』卷七李善注、『白孔六帖』卷八六、『太平御覽』卷三九三・三九九・五八七・七三九等に引かれていて、それぞれに異同があるが、ここは『北堂書鈔』のそれによつた。
- (33) ちなみに、王芭孫『讀賦卮言』には次のような指摘が見える。「自兩漢迄明、其篇之長者、無過宋徐晉卿春秋類對賦、凡換韻至一百五十、凡爲字一萬五千、唐竇臬述書賦、亦爲古今最長之篇、凡一萬八千餘字、然已分上下兩篇、以史籀至五代、趙孝逸一百七十人爲上篇、以唐武德至乾元之始四十七人爲下篇、總其所序、凡二百一十七人……」。
- (34) 注(42)所引『後漢書』參照。また、庾信「哀江南賦」には「張平子見而陋之、固其宜矣」とあり、その條の清の倪璠の注は『藝文類聚』を引いて「藝文類聚云、昔班固觀世祖遷都於洛邑、懼將必踰溢制度、不能遵先聖之正法也、故假西都賓盛稱長安舊制、有陋洛邑之議、而爲東都主人折禮衷以答之、張平子薄而陋之、故更造焉」という。
- (35) G・ルカーチ『小説の理論——大敘事文學の諸形式についての歴史哲學的試み』第一章『著作集』2、白水社刊邦譯、野間宏『サルトル論——小説論と想像力論』(『全集』19)等參照。また、圓谷眞護「A全體Vと人間——野間宏『青年の環』について」(『青年の環』論集)所收は、「その(全體)小説のまず目につく特徴は、非連續の連續と、微視と巨視の統一であり、さらにそれらを總合するものとして辨證法の貫徹である」と指摘するが、小稿で言う意味とは異同がある。
- (36) 『世說新語』排調篇・劉注所引「尸子」。また『淮南子』原道訓・許慎注にも「四方上下曰宇、往古來今日宙、以喻天地」とある。
- (37) 西嶋定生『中國古代帝國の形成と構造——二十等爵制の研究——』參照。
- (38) 栗原朋信「文獻にあらわれたる秦漢兩印の研究」(『秦漢史

の研究」所收)、並びに同「漢帝國と周邊諸民族」(岩波講座「世界歴史」4)参照。

(39) 狩野直禎「後漢末地方豪族の動向——地方分權化と豪族——」(中國中世史研究會編『中國中世史研究』所收)、五井直弘「後漢王朝と豪族」(岩波講座「世界歴史」4所收)等参照。

(40) 范文瀾・前掲書、第三章第五節等参照。

(41) 『後漢書』卷五十九本傳に「徵拜尚書、年六十二、永和四年卒」とあるのによる。

(42) 「二京賦」成立の年を、孫文青『張衡年譜』は、安帝永初元年(一〇七)作者三十歳の時とする。また Hughes, 'Two Chinese Poets' (中島千秋『賦の成立と展開』第五章三九七頁所引)は、順帝永建元年(一二六)に獻ぜられたものとしている。『後漢書』本傳には「永元中、舉孝廉不行、連辟公府不就、時天下承平日久、自王侯以下、莫不踰侈、衡乃擬班固兩都、作二京賦、因以諷諫、精鬼傳會、十年乃成、文多故不載」とあり、京師に上り、「舉孝廉不行」が、和帝永元七年(九五)作者一八歳の時のことであつたとすれば(孫文青・前掲書による)、「二京賦」の作られたのは更に早く、永元一六年(一〇四)作者二七歳前後であつた可能性も考えられる。いずれにしても壯年の作であることには違いない。

(43) 孫文青・前掲書(注42)は、順帝永和三年(一三八)六一歳の作とする。『文選』卷一五李善注には「張衡仕不得志、賦の小品化をめぐって(下)(稻畑)

欲歸於田、因作此賦」とある。

(44) 張衡の文學を「自然科學者」としての立場から論じたものに、金谷治「張衡の立場——張衡の自然觀序章——」(『入矢小川退休記念中國文學論集』所收)がある。

(45) たとえば、近年の比較的早い指摘としては、劉大杰「中國文學發展史」上卷第六章(民國二十二年、一九三二年刊)がある。

(46) 劉大杰・前掲書(注45)の指摘による。建安期の賦の題材を調査したものに網裕次『中國中世文學研究』(補篇、第二章「詠物詩の成立」、鈴木修次『漢魏詩の研究』(第三章第二項)などがある。また、岡村繁「蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢」(『日本中國學會報』第二八集所收)によれば、建安期の賦の題材は、「魏の始祖曹操の賦題を踏襲した諸作品を除いて、その他は總じて蔡邕のそれを先蹤とした作品ばかりである」との指摘がある。

(47) 王粲「傷天賦」・曹髦(高貴郷公)「傷魂賦」・潘岳「悼亡賦」(いずれも『藝文類聚』卷三四所引)。

(48) この例が示すように、魏晉期の賦の小品化を検討するとき、その多くが『藝文類聚』をはじめとする類書に収められていることが、一つの不安の材料となる。ただ全體として、小品賦が多出した現象は否定し難いであらうし、より重要なことは、量の問題であるよりも、質の問題としてであらう。漢代にも、小品の作品は、今日に残された以上に數多く作ら

れていたと想像されるが、魏晉の小品賦がことさらに論じられるのは、その完成度においてであると考えられる。

- (49) この問題に觸れたものに、鈴木修次・前掲書(注46)がある。ただ、この期の共通・類似題材の詩と賦とを對照して、その表現の差異を具體的に明示することは、かなり困難であるように思われる。それほどに兩者は接近して、その點がむしろ問題であらう。賦が敘事性を稀薄化し、抒情的なものに流れてゆく一方で、詩に「故事詩」といわれるような物語的、あるいは敘事的要素の強い作品(「木蘭辭」「秋胡行」など)が盛んに現われてくることなど、この期の詩賦の關係交渉は、單に様式間の問題としてだけではなく、廣く人間の精神のあり様を示す表現史という視點からも、今少し詳細に検討される必要があるのではないかと考えられる。

- (50) この時期の曹植「洛神賦」は、この敘事性と抒情性とをうまく融合させて成功をおさめた作品の一つであらう。

- (51) 岡村繁「後漢末期の評論的氣風について」(『名古屋大學文學部研究論集』文學8) 参照。

- (52) 王符「潜夫論」交際篇には「情實薄而辭厚、念實忽而文想憂……、此俗士可厭之甚也、……士貴有辭、亦憎多口、故曰文質彬彬、然後君子」とある。荀悅「申鑒」雜言下には「辭爲美矣、其理不若拙、文爲顯矣、其中不若樸、博爲盛矣、其正不若約」とある。

- (53) この問題を論じたものに、目加田誠「三語掇」(『言語』一九七四年七月八ことばのことば)、今濱通隆「劇談と默識

と——『世說新語』の「言語」觀についての一考察——」(『中國古典研究』第二十號) 等がある。特に、後者は「劇談」派・「默識」派という二つの異なるグループの存在を指摘し、當時における「默識」派の正統性・優位性を論じている。

- (54) 無論、魏晉六朝期にも、「宮廷」から文學が乖離することはなかつたが、漢王朝のそれと較べて相違するのは、その宮廷が「世界」秩序の中心としての機能も意味作用も持ち得なかつたことである。

- (55) 嚴可均『全晉文』卷一四六(左思別傳注)に「思先造齊都賦成、復欲賦三都、泰始八年、妹芬爲修儀、因移家京師、求爲祕書郎、歷咸寧至太康初賦成、晉書所謂構思十年者也、皇甫謐卒于太康三年、而爲賦序、是賦成必在太康初」とある。

- (56) これを「寫實精神」という視點から捉えたものに、小尾郊一「左思の賦觀——魏晉の賦に於ける寫實精神——」(『廣島大學文學部紀要』16) がある。また、林田愼之助「左思の文學」(『目加田誠博士中國文學論集』所收) 参照。

- (57) 言語表現と對象把握・對象認識の問題は、いわば小説における長篇性の問題や、定型短詩における表現力の問題として、現在なお多くの議論を生ずるであらう。賦における小品化の現象は、その點への一つの検討すべき材料を提示していると思われる。